

CNAC 第10回全国フォーラム

「房総に根づく海辺の文化とくらしINたてやま」

日時:平成 28 年 2 月 6 日(土) 13:30~17:30

場所:南房総たてやま夕日海岸ホテル 1Fマーガレット(千葉県館山市八幡 822)

主催:NPO 法人 海に学ぶ体験活動協議会

後援:国土交通省港湾局 国土交通省関東地方整備局 館山市 一般財団法人みなと総合研究財団

協力:たてやま・海辺の鑑定団 南房総市大房岬自然の家

■開会の挨拶

スピーカー:NPO 法人 海に学ぶ体験活動協議会 代表理事 三好 利和

海に囲まれた日本では、海からたくさん学ぶことがあり、体験する必要があるだろう、ということで、海に学ぶ体験活動協議会は9年前に設立された。今回で10回目の全国フォーラムの開催。

一般的には青少年や子どもたちの活動が多いが、子どもたちだけではなく大人も、それから高齢の先輩方でも、海からいろいろなことが学べる時代になっている。

全国にはいろいろな海辺の活動をされている方がいる。海の生き物に触れてそれを多くの人たちに伝える方、海辺の環境整備ということでごみ拾いをされる方、海辺の暮らしをいろいろ体験するというような活動をする団体もある。その方々をつなぐネットワーク組織ということで私どもは設立した。多くの情報交換、あるいはスキル、技術交換などができれば、と思い、活動してきている。

震災後、人々の中で、残念ながら海が危険な場所であると認識され、いわゆる海離れが広がっていると感じる。その中で、海にもっと近づこうということで、海辺の安全な活動のためのいろいろな資料づくりをしたり、安全講座をしたりといった活動もこの9年の間で続けてきた。さらに多くの仲間を得て、日本の海のすばらしさを学べる体験の場を増やしていきたいということで活動を続けている。

その中で今回この館山を選んだのは、CNACの設立前に、ここ館山で、海辺の体験活動の指導者養成講座の第1回が開かれたこともあり、その縁でCNACの会員で頑張っている方もいる。また、館山という地域、あるいは房総という地域の中で、海にかかわる素晴らしい活動をされている方がいる。第10回の全国フォーラムをこの館山の地で開催することができたこと、特に地元の館山市には多くのご協力をいただき感謝している。房総半島、あるいは館山のよさを、この場をもって発信をしていただき、さらにそれがどんどん日本中に広がっていくよう、私どももお手伝いができればと願っている。

■来賓挨拶1

スピーカー:国土交通省 港湾局 海洋・環境課長 佐々木宏様

本日ここ館山で、全国の港や海辺で体験活動を推進されている皆様が、海に学ぶ体験活動協議会第10回全国フォーラムを開催されるということ、心からお慶びを申し上げます。

先ほど、三好代表の話にもあったように、国民の、海の環境に対する関心を高めるためには、やはり自然との触れ合いの中で体験をしながら学んでいく、ということが最もよい方法であり、重要なことであると

思っている。国民の皆様が海と触れ合う機会を増やしていく、ということが、四方を海に囲まれた海洋国家である我が国にとって非常に重要であると考えている。

国土交通省港湾局では、全国各地の港湾事務所で、港周辺の良い環境を活用した環境学習プログラムである「海辺の自然学校」を実施している。この「海辺の自然学校」は、小・中学校などの教育機関や地域の NPO と連携し、海辺の自然環境を楽しみながら学習することを通じて、港、あるいは海洋に対して、より一層理解を深めていただく、という取り組み。私ども国土交通省港湾局としても、今後も地域に根づいた活動を展開されている皆様と一緒にこういった取り組みを継続することで、国民の皆様の港湾、あるいは海洋に関する関心を高めて、豊かで美しい海を次世代に継承していく取り組みを続けていきたい。

■来賓挨拶2

スピーカー:館山市 市長 金丸 謙一 様

館山市は 34.3 キロメートルと長い海岸線を持っている。半分は黒潮躍る太平洋、残り半分は穏やかな海岸線を持つ東京湾という二面性を持った素晴らしい海岸線がある。平成 12 年に、国から、港を中心にしたまちづくりをする「特定地域振興重要港湾」の指定を受けた。観光とレクリエーションを土台にした、安らぎとくつろぎの持てる海岸をつくっていこう、ということ。そして平成 22 年に、栈橋としては日本一長い「館山夕日栈橋」ができた。そして、そのもとに、“渚の駅”たてやまを作り、憩いを、また人の交流を図れる場所をつくっていこう、ということになっている。

このホテルの前の通りは「鏡ヶ浦通り」と言い、その通りを通して海から見える富士山や、夕日が沈む景色は絶景である。そういうような形で海を中心にしたまちづくりを進めているところである。

ソフト面では、1月は寒中水泳に始まり、先週には一番人気の、海岸線をずっと走る陸連の公認コースである若潮マラソンが行われた。また、海まちフェスタやトライアスロン、オープンウォータースイムレースなど、海に関するイベントを数々取りそろえており、そういった大会も非常に盛んに行われている。これらのイベントを通し、1年中海にかかわるまちづくりに取り組んでいる。

きょうは、各地区地域で海辺の体験に携わっている方のいろいろな話を聞ける、ということで、大変楽しみにしている。

きょう、ここに来るときに、孫がアパートからうちに来て、「じい、どこへ行く？」と言われたので、「これから海の勉強に行ってくる」と言うと、「海で泳ぐの?」「寒いから泳がないよ。勉強なんだ」と言うと、「僕はプールのほうがいい」と言う。今、やはり子どもたちにとってはプールのほうが身近なのか、というような気がして、ちょっとがっかりしたところ。私の子ども時代は、もう大分前になるが、まず海だった。1年中ではなかったが、やはり海と山、特に海は多かった。まず海に行き、海に親しんで、そして多くの感動を海からもらった。学ぶということもあるし、潜ったり、磯遊びをしながら海からの恵みをいただいた。そういうことで、非常に海が身近であって、海から勉強したことや学んだことが多かったと、今、振り返って感じる。なので、先ほど孫からそう言われたときがっかりし、これからしっかりと孫を海に連れていかなければいけないと反省をしたところ。

CNAC の活動がますます盛んになることを、また、海辺を、子どもから大人まで、というより、お年寄りま

で、幅広い世代の方々に楽しんでもらえるようになることを願う。

■来賓挨拶3

スピーカー:(一財)みなと総合研究財団 理事長 鬼頭 平三 様

私どもは、平成23年に公益法人改革の一環として、一般財団法人に衣替えをして、ことしで5年目を迎える。この間、国や地方自治体など、行政が抱える問題解決の手伝いをするという、シンクタンクの機能に加え、行政と民間の間をつなぐ、いわば橋渡し役の機能も担ってきた。少しかたい言葉でいうと、公益目的事業と呼んでいるが、この CNAC の活動も、この公益目的事業の一環として、全面的に支援させていただいている。

先ほど来、三好代表のお話にもあったし、皆様のご挨拶の中にもあったが、若者、そして子どもを中心とした海離れが進んでいると言われて久しいことは皆さんもご存じのとおりである。よく引き合いに出される数字で、夏場に海水浴に行く人の数が、30年前には4000万人近くいたけれども、今はその4分の1にも満たない900万人ほどということで、夏のレジャーの中でも、ベスト10の中で7位までランクが落ちてしまったという状況のようである。金丸市長のお話にもあったように、私たちの子どもころは、夏休みが終わると日やけの黒さを競い合うという、今では考えられない、少し遠い昔のような話だが、残念ながらこれが現実のようである。

本日のフォーラムを通して、それぞれの地域で、個性ある、海に親しむための取り組みを進めている皆様のお話を聞き、これからの活動にもつなげていきたい。

■基調講演

プレゼンター:荒井 一利さん

鴨川シーワールド総支配人 兼 館長 兼 国際海洋生物研究所所長

房総から発信する鴨川シーワールドの役割

初めに

今日は、鴨川シーワールドの活動と、中でも一番海との接点が大きな、動物の保護についての話をさせていただきます。

1. 水族館の4つの使命・役割

日本には水族館がおよそ100あると言われている。中国に100、アメリカに100、日本に100、そしてその他の地域で100~200、全世界に400~500の水族館があると言われており、日本に100水族館があるのは、面積や人口のことを考えると、大変水族館が多い国であると言える。

公益社団法人日本動物園水族館協会(以下、JAZA)という組織があり、日本の動物園や水族館を束ねる組織で、入会審査があり、幹部の人間がきちんとチェックをし、理事会を通してJAZAに加盟するかどうかを決定する。ここに入っている水族館で数えると、日本には今62の水族館がある。ちなみに動物

園は 89 園あり、日本には 151 の水族館、動物園がある。

それでは、この水族館、動物園というのはい体何をするとところなのか、社会的にどのような使命、あるいは役割を持っているのか。JAZA によると、「レクリエーション」、「教育」、「種の保存」、「調査研究」この 4つを行うのが水族館、動物園である、と定義されている。

2. 鴨川シーワールドの役割

では、この4つの役割を受けて、鴨川シーワールドはい体どのようなところなのか。鴨川シーワールドの基本方針は、まず、「海の世界との出会い」というコンセプトがあり、その他に、4つの方針がある。

水族館というのはい、水生生物を展示するのが最大の目的である。鴨川シーワールドの展示は、「自然環境の再現と生態展示」であり、その水生生物の生息している環境を再現し、そしてその中で生き生きとしている生物を展示することを1つの基本方針としている。

鴨川シーワールドでは4つの海獣類のショーをしており、このショーを私たちは「パフォーマンス」と呼んでいるが、その「パフォーマンス」。それから「楽しく学べる参加型教育活動」。そして、水族館、動物園の使命としても出てきた「種の保存」活動、「繁殖の推進」。

きょうはこの教育、調査、研究のテーマになっている「種の保存」活動について皆さんに紹介したい。

3. 「種の保存」とは

まず、「種の保存」というのはい体どのようなものかと言うと、大きく分けて「生息域内保全」と「生息域外保全」の2つに分かれる。

「生息域内保全」というのは野生で動物を保護すること。そして「生息域外保全」というのは、動物園や水族館、あるいは研究所など、あるいは植物園で、生物の「種の保存」をすること。もちろん、最終的な目標は野生での生物の保全だが、そのために動物園や水族館が最終的に「生息域内保全」に協力をし、絶滅のおそれのある野生動植物の「種の保存」をしよう、というのが、いわゆる「種の保存」の一つの考え方である。

4. 鴨川シーワールドの「種の保存」活動

鴨川シーワールドの活動のひとつは、弱った動物を助けることである。

次に、今、日本の淡水、川や田んぼに生息している生物はどんどん少なくなっている状況であり、シャープゲンゴロウモドキという淡水性の水生昆虫の「生息域内保全」、野生での保全活動を行っている。「生物多様性コーナー」という鴨川シーワールドの中にある展示コーナーでは、シャープゲンゴロウモドキや、ミヤコタナゴなどの生物の展示を通して保全活動を紹介し、また、今どんな状況にあるかを千葉県と協力して展示している。

それから、水族館の中だけではなく、千葉県の学校や幼稚園にも出向き、ウミガメの保全についてレクチャーをする「ウミガメ移動教室」を実施している。

これが鴨川シーワールドの大きな4つの「種の保存」活動であり、きょうは、この動物たちの保護についての話と、それからウミガメの保全活動について紹介する。

5. イルカの保護について

日本の沿岸には、たくさんのだま網があり、だま網漁業が大変盛んに行われている。そのおかげで、私たちは常に新鮮な地場の魚を食べることができるが、日本の沿岸に生息しているイルカたちが時々だま網に間違って入ってしまうことがあり、そういう時は動物の扱いに慣れている私たちが連絡を受けて、元気な個体については海に帰す、という手伝いをしている。

中には健康ではなく弱っている個体もいるので、そういう個体は水族館に運んで治療を行っている。

だま網ではなく浜に上がってしまうことがあり、これを座礁あるいはストランディングというが、こういう個体の中には大変弱っている個体もいるので、その場合は水族館に運んで治療をしなければならない。

私たちは行政からの依頼を受けて行くが、到着までの間地元の方が動物に水をかけてくださっていたりする。まず、こういう動物を見つけたら、体表が乾燥しないように常に水をかけてあげて欲しい。ただし、イルカの鼻が頭のとっぺんについているが、鼻の中に水を入れると、人間が鼻から水を吸ってしまうのと同じように溺れてしまうので、この穴の中には水がかからないように注意をして水をかけて、私たちが行くまで我慢してつき合っていたきたい。

それから、ここで3個体のイルカが座礁しているが、これを集団座礁と言ひ、昨年ひ茨城県で 100 頭から 200 頭のイルカが座礁をした。こうなるとほとんどが助けることができない。そのような事態も起こる。

6. イルカはなぜ座礁するのか

なぜ座礁するのかと言うと、まず、単体の場合はほとんどが病気やけがの場合が多い。それから、ソナー不良。イルカは自分で音を出して、はね返った音を自分で受けて、自分がどういうところにいるとか、いわゆる障害物との距離とか、そういうものがわかる特殊な能力があるが、何らかの理由でそのソナーが使えなくなって、最近ひ座礁した個体をよく調べると、耳がよくないようなケースも見受けられる。あるいは砂浜だと音を出しても反射しないで吸収されてしまうので、砂浜に上がることも多い。

それから、天敵に追われるとかいろいろなことがあるが、最近言われているのが、渡り鳥やイルカなど回遊をする動物は体内に磁石を持っており、方角がわかるような仕組みになっていて、北、南がわかるということだが、地球の磁気が場所によってかなり乱れるところがあり、例えば、昨年カズハゴンドウというイルカが百何十頭と茨城県で上がったが、そこは大変地磁気が乱れやすく、よくそこで座礁する。最近ひ、集団座礁する場合はこの地磁気の問題があるのではないか、というのが一つの有力な説になっているが、一体何で座礁をするのか、というのは、複合的な理由なのかどうなのかもよくわかってないのが実情。

7. イルカの保護方法

鴨川シーワールドの施設には、底が上がるプールが1つあり、その施設を使って弱った動物たちを保護している。保護した動物は弱っていることもあるし、また、長時間浜に上がっていると、私たちが長い間正座をして足がしびれるのと同じように尾びれがしびれてしまい泳げないのでしばらく係員がついて泳ぐようにする。また、イルカは水分を餌から補給するが、衰弱している動物は餌を食べていないのでまず脱水になる。それが致命傷で死んでしまうことが多い。「強制補液」と私たちは呼んでいるが、簡単に言う

とホースを胃の中に入れて水を飲ませる。そして、ある程度泳げるようになると水位を上げるが、中には倒れてしまう個体があるので救命胴衣をつけたりする。

動物を保護するという事は、大変な仕事がプラスアルファで増えるし、ほとんどの場合かなり衰弱していて目を離せないで、我々は「ワッチ」と呼んでいるが、24 時間監視体制で行う。当然時間外も超過労働手当も出さなければならないので、経営者としてはちょっと頭の痛いところ。係員もとても疲れるし、大変な作業になる。

そういう大変な経験をしている中で、一つ我々にとって大変勉強になることがあり、それは、普段まず見ることができないような動物と出会えること。それから、動物の生命を守ることで、そこで得た知識や経験は我々の飼育動物が体調を崩したときにも応用ができる。一方では大変な作業だが、一方では大変いい勉強をする機会でもある。

8. コマッコウ

一般の人はめったに見ることができないというぐらい、大変珍しい種類の「コマッコウ」について。

2003 年に、館山と鴨川の間で和田というところの長者川にコマッコウが座礁し、私たちが保護した。コマッコウはすごく変わっていて、「呼吸孔」と呼んでいるが、頭の上に鼻があり、通常は尾びれ側があいて、プハッと呼吸をするが、このコマッコウは、前がパカッと開いて前に向けて呼吸をする。普通のイルカとは全く正反対の向きに鼻がついている。

ダルマザメというサメに食べられた傷があり、化膿していた。ダルマザメの傷というのは座礁したイルカにかなりの頻度でついている。このダルマザメについてはまた後ほど紹介する。

これも座礁したイルカにはよくついているペンネラという寄生虫で、長さは 10 センチぐらいのものもあり、甲殻類で、エビ、カニの仲間。フジツボに近い種類で、魚にもよく見られ、サカナジラミなどとも呼ばれているが、これがいっぱいついていた。

コマッコウは下あごだけで 30 本ぐらいのとがった小さな歯がついていて、偽鰓(ぎさい)と呼ばれる鰓に似た模様もあり、サメに擬態しているのではないかとされている。実際に本物を見ると、サメに似ていると思う。

コマッコウは暖かいほうに住んでおり、和歌山県の漁師は海でこのコマッコウを追いかけると、海の中でポツポツと赤い花火のようなものが上がるというふうによく言う。向こうの地方では花火のことを網火というが、「網火をよくする」というふうに言われていた。飼育をしていると、ある日突然、プールが赤黒くなってしまう。これは何かと、研究者も含めて昔からの謎だったが、我々で飼育をしていてあることがわかった。通常のうんこもするが、驚いた時に、自分で赤黒いうんこをしてその中に隠れるという、大変珍しい習性を持っていることがわかった。自分でうんこをして、その中に隠れるという、とんでもない動物なわけだが、それがわかって、我々は苦労してそういったシーンを見ることができて、一つまた勉強になった。

9. 鰭脚類トドの保護

一昨年 11 月に九十九里浜で発見されたトドの話。これもマスコミにいろいろと載ったので記憶にある方もいると思う。

2010年の11月に、山武市の殿下海岸というところでトドが発見された。トドというのは普通秋から冬にかけて北海道沿岸に北のほうから南下してくる。たまに津軽海峡を越えることがあるが、めったに越えることがなく、そして、春から初夏にかけて北のほうにまた戻っていくとそういう種類の動物で、こんなところで見られるのは大変珍しい。

山武市の市役所から連絡をもらい、確認に行くところという状況だったので、ちょっと様子を見ようということになった。次の日にまた見に行くと、大変痩せ細り衰弱していたので、この動物をこの場所で捕獲するというのはとても大変な作業だったが何とかやってみた。

大変危険な作業で、イルカはそうでもないが、特にこの大きなトドやアザラシ、鰭脚類(ききやくるい)、ひれあし類と呼んでいるが、こういう個体を保護するのはなかなか簡単にはいかない作業。

動物を保護する時は、私たちだけでは全くできない。この時も山武市の方々に協力してもらい、何とか捕獲することができて鴨川に運んできたが、全く動かない。この個体は成獣の雌で、どちらかという年をとっている。大変痩せていて、このぐらいの個体だと体重は250~300キログラムあるが、196キログラムしかなかった。

先ほど、イルカの時に話したが、脱水状態にあるので、何とか水を飲ませたい。イルカは簡単にホースを入れて飲ませることができるが、なかなかこの個体にホースを入れるのは難しいので、皮下から水分を補給し、しかしそんなものでは全然足りないので、なんとか檻の中にいたままホースを口の中に入れて飲ませ、水を与えることによって状態がよくなった。

傷も6カ所あり、すごく化膿していたので、外から消毒をし、何とか傷がだんだん塞がってきた。これも先ほど話したダルマザメの傷だった。

これがダルマザメ。体長は30センチから50センチなのでそんなに大きくはない、小さなサメ。だるまと言うが全然だるまに似ていない。子ども用の野球のバットのような格好をしている。英名がクッキーカッターシャークと言う。クッキーをつくるときに型をとる道具をクッキーカッターと言うが、日本語よりは英語のほうがこのサメのことを表している。この個体が弾丸のように飛んできて、当たって、グリッと1回転し、まさにクッキーの型をとるように肉をとって、それで逃げていく。それを主食にしているというサメ。

その後元気になり、展示プールに入れて、他の個体と一緒にすることができた。今、体重は300キロに増えて、この個体は何とか海に帰れそうだと思います、鴨川や山武市に放しても何もならないので北海道で放流をしようとしたが、北海道は私が考えた以上にトドの食害というものに関心が強く、トドは害獣扱いになっており、こんなところにトドを放すのかと怒られて、仕方なく鴨川で飼育を続けている。

10. 房総半島での鰭脚類保護の状況

大変珍しいといいながらも、2001年の勝浦でもトドを確認しており、他の鰭脚類のアシカやアザラシなども、房総半島でも何度も確認されている。

アザラシも、北海道のオホーツクに流氷に乗ってやってくる。そして春になり、流氷が解けると同時に北へ戻るという生態なので、ここに来るのは大変珍しい。

オットセイは北太平洋のいろんな島で繁殖期を過ごし、繁殖期が終わると鮫子沖まで回遊してくるので、地域的にはこの周辺にいるが、ずっと沖合を泳いでいるので、ほとんど我々が目にすることはない。

我々が目にするということは、何らかの異常があるというサインである。

これは、2010年のワモンアザラシ。先ほど言ったように、オホーツク海に流氷とともにやってきて、また流氷とともに去っていく種類だが、大原の漁港で座礁していて保護した。

これは白子海岸にいたオットセイ。まず、陸に上がることはないの、何らかの異常はあるのだろうが、私たちが近づくと大変怒っていたので、まだ元気があるので保護はしなかった。

あと、大変珍しいのは、館山の波左間でゾウアザラシが座礁していた。雄のキタゾウアザラシは、世界で2番目に大きくなるアザラシで、体重5トンぐらいになるが、カリフォルニアで生活しているので、太平洋を横断して館山まで来てしまったメスのアザラシ。何と9,000キロ泳いできてしまったという、これも大変珍しい例。そういうアザラシやトドがこの房総半島でも確認されている。

11. ゴマフアザラシのカモちゃん

2004年3月、2005年1月、2005年12月の3回、ゴマフアザラシがこの鴨川シーワールドの前の浜に来た。元気だったので保護はしなかった。いろいろ考えたが元気だったので、できるだけ優しく見守ろうという方針でそのままにしておいたら、何回かはいなくなったが、3回も帰ってきた。記憶にある方もいると思うが、カモちゃんと呼ばれているアザラシで、最初にTBSの取材で、私が鴨川だからカモちゃんと言ったのがそのまま名前になって、これは誰でもカモちゃんとするのだが、私が名づけ親みたいになってしまった。

3回目に来たときに、当時そういったことが流行っていたのものあり、鴨川市の名誉市民にしようということになって、シーワールドでセレモニーをして、名づけ親の私がそこでスピーチをやらされて、「鴨川というのは大変いい環境なので、カモちゃんが3回も戻ってきました」と言ったら、次の日からいなくなってしまった。結局、そのときは、3~4日しかいなかった。ちょっと私は恥ずかしくて、しばらく鴨川の町を歩けなかった。

12. ウミガメのはなし

アカウミガメという種類のウミガメは、甲羅の長さが大人になると1メートル、体重が大きなもので100キロぐらいになるウミガメ。世界には7種類のウミガメがいて、そのうち5種類が日本に生息している。そして、このアカウミガメが毎年産卵に来る。房総半島が産卵場所の一応北限と言われている。たまに福島でも産卵が確認されているが、常に産卵を行っているのは房総半島が北限と言われている。

鴨川シーワールドの前に、3キロの東条海岸という海岸があり、ここに毎年シーズンになるとアカウミガメが産卵にやってくる。もちろん、雌の母亀が陸上に上がってきて、大体30~40センチの穴を自分で掘る。この卵を大体100~120個ぐらい穴の中に産む。そして砂を自分でかけて、穴の中で卵が50日間過ごして、ふ化をして、そして海に戻っていく。

これが、子ガメのレプリカで、これが大人になると100キロになる。このウミガメが50日後に海に戻っていく。

白く見えるのが卵で、これは母ガメが卵を産んでいるところ。お母さんは卵を産んで、このように海に戻っていき、移動するときにキャタピラーの跡のような跡がつく。

これがちょうど卵を産んだ後で、我々はこれをボディピットと呼んでいるが、ここにキャタピラーのような跡があって、ここに何となく掘り起こしたような跡がある。シーズンになると係員は毎朝3キロメートルの浜を確認して、産んだ跡があるかどうかというのをチェックする。そして、掘って、卵を確認して、数を数える。そして、また埋め戻して、流木でこの卵の産卵巣、巣という字を書きまして、サンランソウと呼んでいるが、この産卵巣の周りに流木を立てて、そして、ここに卵がいるという看板をつける、という作業を毎日行っている。

最初は、こんなものをつけると逆にいたずらをされてしまうのではないかと心配したが、鴨川市の方は大変いい人なので、そういう事故もこれまでになかった。

我々がこの活動を始めたのは 2002 年で、全国的に浜の問題というのがあるが、浜の面積が大変狭くなってきており、東条海岸も非常に浜が狭くなってきている。私が入社したころは、海の水温を計りに行くのがとても大変で、ずっと歩かないと波打ち際まで行けなかったのだが、今はすぐ目の前に波打ち際があるので、水温を計るのは簡単になったが、ウミガメにはちょっと難儀になっている。

13. 自然の海と鴨川シーワールドの孵化数

ウミガメはここで産んでいる。通常ならばこれでいいが、台風が近づくと川が氾濫してきて、あるいは波がかぶってくる。水がかぶると卵は死んでしまうので何とかしないとイケない。

まず、もっと別の、浜の中でもっと安全な場所を探して移植しようとするが、東条海岸はどこもみんな狭くなっているのなかなかいい場所が見つからない。台風がひどくなってくると仕方がないので私たちの施設に保護する。

これが、2002 年からの、黄色が産卵した回数、水色が上陸の跡はあったが、産卵はしなかった回数。2011 年、震災後の 2012 年、多分これは震災と何か関係があると思うのだが、ものすごく増えたけれども、またちょっと数が減ってきている。

大体5月の中旬から産卵が見られて、9月の月上旬まで見られる。7月の下旬辺りがピークで、7月の中旬にちょっと1回下がる。わからないが、ひよっとすると水温の関係、大体この頃は一度鴨川の水温が下がるので、その関係もあるのかもしれない。

そして、浜の状況と全く同じような状況にして、卵の上下を間違えるとふ化しないので、間違えないように移植する。ウミガメの施設は一番浜に近いところにつくった。

2002～2013 年の 15 年間で、浜の産卵巣数は 91、そのうち 60 の産卵巣を鴨川シーワールドに持ってきた。つまり 63%は台風などによって移植をしなければならなかった。卵の数でいうと、総数が1万個、そして 6,500 個をシーワールドに保護した。自然の浜でその後ふ化したのは 1,800 個で約 49%、鴨川シーワールドに持ってきたのが 60%のふ化数、自然の海と鴨川シーワールドでは鴨川シーワールドに持ってきた方がふ化率がいいという、ちょっと複雑な気持ちになる結果が出ている。全体としては、約 5,700 の子ガメが巣立っていったということ。逆に言うと、保護をしなかったら、約 4,000 の子ガメは死んでしまったという話。

14. 子ガメの孵化

砂の中でふ化をして、数日して砂の中からもこもこっと出てくる。これが自然の海だと、満月のときに、出てくると言われている。ところが、よく考えると砂の中にいるわけなので、満月などわからないので、どうして出てくるのか謎。確かに満月だと海が明るいので一理はあるが、もっと複雑なメカニズムがあるだろうということで、私たちですっといろんなことを調べているがまだわからない。そして、どういうわけかみんな海のほうに向かっていく。これも、なぜそっちへ行けるのかというのは謎。

ふ化した子ガメは、浜の一番近くに特製の橋を作り、砂浜でふ化した子ガメが海に行くようにしている。昔はよく日中にお客様に放流をさせたりしていたが、それは亀にとってはとてもよくないということがわかってきたので、今は人知れず、夜にこっそり海に放すような形にしている。これが海に帰すところ。穴を出て、そろそろ出てきたのを一旦貯めて、そろそろ、そろそろ出ていく。

こうして海に戻り、子ガメの間はずっと海にいて、雄の亀は一生海にいる。そして、雌の成獣、大人になった亀だけが、産卵のために陸地が上がってくる。子ガメは一体どこに行ってしまうかという、恐らく太平洋の真ん中、あるいは、カリフォルニアのちょっと手前ぐらいまで行くというデータがある。

15. 自然淘汰と保護活動

私たちが人為的に保護をすることによって 4,000 の亀の命が救われているわけだが、しなかった場合は自然に淘汰されているわけで、実は我々が保護したことによって何らかの歪みがどこかに生まれているのかもしれない。できるだけ人間の手を介さずにやろうとはしているが、浜から移植するときには人間の力が入ってくるし、また、この放流の方法もできるだけ自然な状況で、とはいいいながらも、人間が介在しているので、毎年、何となくやるせない気持ちになるが、だからといって、目の前で卵が生まれていて、水がかかって死ぬのを、指をくわえて見ているわけにもいかないの、ちょっと複雑な気持ちを持ちながら、毎年このウミガメの保護活動を続けている。

このように海の接点を大切に、今後もいろいろなところで貢献していきたい。

■活動事例① 海とのつながり、くじらの食文化

プレゼンター: 樺原八千代さん くじら食文化研究会おかみさんの会代表／

株式会社南美舎(みなみや)代表取締役

はじめに

- ・くじらの食文化は房総の古くからの歴史の一端である。
- ・鯨料理店のおかみとして、おかみさんの会から始まり、今現在は、南房総市和田町の鯨をテーマにしたWA・O！という道の駅の中のテナントの会社をやっている。

1. 和田の鯨

房総の鯨というのは、醍醐新兵衛が、今の鋸南の辺で始めたのが始まりと聞いている。そして、館山に来て、白浜に来て、千倉に来て、最後、昭和 23 年頃、和田に来た。ただし、そのころは食料も何もないので、若い方はご存じないかもしれないが、肉屋なんていうものは、その時代、うちのほうの田舎にはな

かったので、肉といったら鯨の肉、そういった時代だった。

その中で、鯨は夏だけが漁期で(現在は6/20~8/30)、日本全国で約60頭近くの鯨を獲っている。和田の外房捕鯨が獲っている鯨は、その中の26頭を、商業捕鯨ではなくて沿岸捕鯨として獲っている。

昔、うちのすぐ下の隣が鯨の工場で、内臓や血を肥料に加工して天日で干しているのが大変な匂いで、夏になるとその匂いが町中に充満した。その頃は今みたいに公害という概念もなかったが、今でいう公害。うちは旅館で、長期滞在のお客様がその匂いを嗅いだ途端に荷物をまとめて帰ってしまう。母親に、「お客様帰っちゃったよ。臭いもんね」と言うと、「臭いと言うんじゃありません」と。それは、地域で認められていたものだった。

2. 鯨の“たれ”と時雨煮

その頃は皮が油として重宝されていて、肉はどうでもいいものだったので、町の人みんな並んで解体所に行き、鯨の肉をもらって過ごしていた。

ご存じの方も多いと思うが、都会から来られる方は鯨のたれと言うと液体のたれを想像されるが、鯨の肉を薄く割いて天日に干したものだ。その様子が、血が垂れ下がるから、とか、肉が垂れるから、たれと言われてきた。そういった鯨のたれや、いわゆる時雨煮。私たちは鯨の煮たんが、というのが、煮たものという意味。10軒あれば10通りの時雨煮の味があり、それを私たちは親の代から代々繋がって、鯨の煮た物と鯨のたれを嫁として教わる。鯨のたれは、今は醤油やみりんに漬けて干したものが大変人気だが、昔は塩水で、鯨の肉を解体してバケツに入れておくとドリップが溜まり、そのドリップを塩水に戻してやるとそれが鯨を漬け込むための調味料になる。ドリップ、いわゆる血には大変な旨味が含まれていて、これは私も「くじら食文化研究会」を通じて、「クジラ食文化を守る会」という、東京農大名誉教授の小泉武夫先生が理事長を務めていらっしゃる会へ加わって勉強をさせていただき学んだ。

3. 鯨肉の給食

外房捕鯨という和田町の捕鯨会社が、初めて鯨が上がった時には、和田の小学校5年生を対象に、初漁祭を開催して、解体から食べるまでを小学生に経験させている。外房捕鯨により、給食にも年に何回か鯨の肉が出されている。私たちの時代はしょっちゅう給食で鯨の肉が出ていたが、今鯨の肉も貴重品になって、他の学校では出ない。子どもたちも解体を見ながら、「わー、気持ち悪い」と言いながらもちゃんと食べる。和田では珍しい食材でない。ただ、大変貴重になってきたのは事実。貴重になった分、値段も上がった。

昔はバケツ1杯ただで貰っていたものが、今、バケツ1杯といったら、1万円札を持っていかないと買えないほどになった。時代の移り変わりを強く感じる。

4. 「フード・アクション・ニッポン アワード 2011」

「クジラ食文化を守る会」を、おかみさんの会で3回ほど開催したが満員御礼だった。和田町の公民館、あるいはコミュニティーセンターで発表し、近隣の館山、鴨川だけではなくて、大変大勢の方に、鯨料理の今昔の話をし、私たちの考えた鯨料理を含めて30何種類の料理を提供した。

そんな活動が認められて、「フード・アクション・ニッポン アワード 2011」のコミュニケーション部門の最優秀賞をいただいた。鯨を通じての活動に対しての評価だったが、私たちは賞を貰うことを考えながらやってきたわけではないが、たまたま目に留まって賞をいただいた。

おかみさんの会をやりたと思ったきっかけが、和田の海岸から上がる月が大変美しく、この月が、観光の目玉にならないだろうか、と思い、もう1つの目玉、食に関しては鯨があるじゃないか、と。そういったことを考えながら地域との関わりを考えてきた。

「青い月夜の浜辺には～」で始まる「浜千鳥」という歌が、今南房総市のお昼のチャイムに鳴っている。月が海から上がるのが大変きれいだということを歌った歌で、そういった掘り起こしを考えながら、食べることで、地元で子どもたちや主人たちの口に入れるものを毎日作っている私たちだからできることを、と考えて活動してきた。

5. 道の駅「WA・O！（ワオ）」

道の駅ではテナントとして頑張っているが、今、鯨を取り巻く環境というのは、皆さんもよくご存じのとおり大変厳しい。私にできることは、小さな町だが、鯨で発信していくこと。若い方にぜひ鯨を食べていただきたい。

「WA・O！」では、日本全国の鯨の仲間から缶詰を集めたり、いろんな食材を日本全国から集めて売っている。和田、房総の鯨だけではなく、日本全国の鯨の仲間と手を組んでいきたい、という思いで頑張っている。

■活動事例② 館山夕日栈橋・“渚の駅”たてやま を活用した地域の活性化

プレゼンター：石井 博臣さん 館山市経済観光部プロモーションみなと課 課長

はじめに

・行政の立場で、館山夕日栈橋、そして渚の駅を活用した地域の活性化について話をする。

1. 実は東京から近い館山

まず、館山の紹介。今日皆さんに一番持ち帰っていただきたいのは、「実は館山は東京から近い」ということ。プロモーションでよく都心に行くが、パンフレットなどを配りながらプロモーションをする時に、「千葉の館山から来ました」と言うと、「随分遠くから来たんですね」と結構言われる。でも、首都高さえ空いていれば、車で1時間ちょっとで来てしまう。そのぐらい近いということを、ちょっと頭に入れて帰っていただきたい。

2. 館山と海の繋がり歴史

続いて、館山と海の繋がりを歴史的に振り返ってみたい。

まず古代。神話によると、天(あめの)富(とみの)命(みこと)が忌部(いんべ)一族を率いて移住をしてきて、この忌部一族というのが宮中に神殿を建てて、布を作ったりお祭りの道具を作ったり、いわゆる物づくり

集団で、この人たちが黒潮に乗って阿波から安房へ移住して、房総の開拓が始まったと言われている。

中世になると、里見一族が 170 年間、10 代にわたってこの辺りを治めた。9代目ぐらいのお殿様の時から館山に本拠地を移し、天然の良港である高の島湊を利用して、物流と交通のターミナルを形成していく。いわゆる里見氏による流通都市館山の形成がこの時に成されていくが、東京湾の入り口という要所にあったので、江戸幕府が開府されると、外様大名なので、鳥取の方に改易になってしまう。

江戸時代、鮮魚を江戸まで高速で運ぶ押送(おしょくり)船(ぶね)という高速船が開発される。この時は、この辺りは、通常陸路だと3泊4日かかるところを、何と 10 時間で江戸に送ってしまうという超高速船が開発された。尚且つ、江戸湾に入る船は浦賀あたりで臨検を受けていたが、この押送船だけはそれを免れて江戸に届けられたということで、特区のようなことが既に行われていたことになる。全国の物産を江戸に海上輸送する海運業者もこの頃生まれた。

こうしたことから、現代の初めぐらいまで海上輸送が物流の中心を担っていたが、大正7年頃に鉄道が開通されると一変し、陸路の鉄道で、4時間で両国まで行ってしまったので、だんだん物資の輸送が陸上輸送にシフトしていき、市街地もそれに伴って動いていった。ただ、昭和40年半ばぐらいまでは海水浴場も盛んだったので、今の東海汽船の橋丸が館山港まで来ていた。

3. 特定地域振興重要港湾選定と、館山港港湾振興ビジョンの策定

歴史を紐解くことで見えてくる館山の未来があると思うが、これほど海を中心に栄えてきた館山において、これからも海を中心に地域の活性化を図っていくのが当然の考え方で、その中で一つ大きな転機を迎えたのが、特定地域振興重要港湾、我々は特振港と呼んでいるが、平成12年5月に当時の運輸省から選定を受けた。これは地域の振興に重要な役割を果たすことが期待される港湾を国交省、当時の運輸省が選定したものだが、館山の場合は、特に観光レクリエーション機能を図る駅、港湾ということで選定をされて、物流というよりは、人の交流、いわゆる人流港ということで整備を進めていく港湾という風に位置づけられた。

特振港の選定を受けて、翌年度、館山港港湾振興ビジョンの策定に入った。

これは、館山港の観光・レクリエーション機能の強化を図りながら、南房総の玄関口として、地域の活性化に利用するという考え方の元、策定され、大きく分けて、観光振興に貢献する海辺のまちづくりプランと、海洋レクリエーション振興に貢献する海辺のまちづくりプランということで指針が定められており、このビジョンに向けたハードとソフトのプランが進められていった。

ハードプランとしては、係留施設を作っていかなければいけないということで、一つは館山の棧橋を作ること、そしてもう一つは、交流拠点、“渚の駅”たてやまを作ること。そして、ソフトプランとしては、ポートセールスやポートサービス、あるいは観光情報の発信、こういったものを兼ね備えているということで進められている。

4. 館山夕日棧橋と“渚の駅”たてやま

正式名称、館山港多目的観光棧橋(愛称、館山夕日棧橋)は、平成19年9月に基部の工事が始まり、平成22年4月に供用が開始された。沖に400メートル、基部も含めると500メートルということで、道路形

式の棧橋としては日本一の棧橋になる。

“渚の駅”たてやまの整備は、千葉県安房博物館の運営管理が館山市に移譲され、平成 21 年の8月から整備を開始し、平成 24 年の3月に海辺の広場と展望デッキ、それから渚の博物館をオープンした。そして、少し遅れて、平成 26 年 11 月には商業施設棟も完成し、今の姿となった。

5. 「千(船)客万来の交流拠点・館山湾」～館山湾振興ビジョンの話～

こういった棧橋と渚の駅などのハードが着々と進められていく中で、館山湾を中心として館山市全体を活性化し、さらなる魅力向上を図っていくと、交流人口の拡大や地域の活性化、海辺のまちづくりを実現するためのビジョンとして、館山湾振興ビジョンが策定された。この基本理念が、「千(船)客万来の交流拠点・館山湾」ということで、7つのプロジェクトから成っている。

このビジョンに基づき、さまざまなソフト事業も展開している。

まず、クルーズ船の寄港。こちらは、市長が船会社に自ら赴くトップセールスを繰り返しており、さまざまな船がこれまでに館山港に入っている。特に商船三井客船の「にっぽん丸」は、毎年8月8日に開催される館山湾花火大会での1泊2日のクルーズが非常に人気で、発売と同時に売り切れてしまうようなクルーズ商品となっており、昨年の8月8日で16回目を迎えた。

それから、定期旅客船の就航ということで、これは東海汽船の高速ジェット船の季節運航を毎年この時期にやっている。今年で13回目。実は今年が今日が第1便で、ちょうど午前中、東京竹芝からの船をお迎えし、大島に送り出したところで、私も市長の号令で大漁旗を振ってお迎えした。大島まで55分。

それから、もう一つ、湾内の遊覧船ということで、海中観光船が就航している。これは平成 25 年から館山夕日棧橋を起点に発着をしており、小型船舶の係留施設はマイナス3メートルの岸壁から出ている。棧橋から出て、沖ノ島を回って、海中の様子を見るという観光船で、毎年1万人を超える客でにぎわっている。

こうした客船の他に、官公庁船の誘致にも取り組んでいる。例えば、海上自衛隊や海上保安庁、あるいは国土交通省、航海訓練所など、さまざまなところに働きかけている。

6. “渚の駅”たてやまでの観光情報発信

昨年の8月から Pepper 君をおもてなし見習いということで採用した。

さらに、昨年の終わり頃、さかなクンが“渚の駅”たてやま名誉駅長に就任し、さかなクンのギャラリーもできた。

7. ビーチスポーツの振興

トライアスロン、オーシャンフェスタ館山、ビーチバレーなど、ビーチスポーツ等の振興にも力を入れている。平成 24 年の4月にはトライアスロンのアジア選手権大会が館山で開催された。こうしたさまざまなスポーツイベントが取り組まれている。

スポーツ以外のイベントでは、たてやま海まちフェスタやウミホタル観察会、サンセットウォーキング、ビーチコーミング、それから子どもたちを対象とした、ちよい投げ釣り教室なども棧橋で開催しており、さ

さまざまな形で海に親しむイベントを実施している。

8. 新しい取り組み＝北条ビーチマーケット

それから、北条ビーチマーケットという新しい取り組みも昨年からはまった。海水浴場を楽しむ人が減ってきた中で、それ以外の海辺のライフスタイルの良さを再認識するきっかけを作ろう、ということで、官民共同で行っている。BEACHヨガやSUP(スタンドアップパドル)体験など。また、近くでは有機野菜を売るビーチマーケットも開催されている。

9. 安心・安全な館山の海水浴場の確保に関する条例

海を利用する人が全てマナーが良いというわけではなく、中にはちょっとマナーの悪い人もいる。特に館山の場合は、水上バイクをやっている人のマナーがちょっと問題になっており、海・浜のルールブックを定めたが、それでもなかなか向上が図られないということで、昨年の7月から、安心・安全な館山の海水浴場の確保に関する条例を定めた。

これは、海水浴場が適用になっているが、水上バイクの海水浴場エリアへの進入や砂浜でのバーベキュー、あるいは入れ墨の露出、ごみの投棄、そういったものを条例で禁止した。併せて、これを進めるに当たって、警察や海保、千葉県にも協力をいただき、特に去年は、館山警察署の方で海岸に臨時交番を作っていただいた。さらに、日によっては警察、海保、それから県と合同のパトロールを行った結果、去年はこうしたマナーの悪いことに対する苦情が激減した。非常に効果があったと感じている。

この流れが、隣の南房総市や鴨川市、あるいは外房の市町にも広がっており、近々に条例を定めるような動きがあると聞いている。

10. 首都圏災害時における館山港の役割

首都圏の災害に備えた館山港の立ち位置として、仮に東京で直下型の大地震が起こり、東京湾内の港湾が使えないような状況が発生した時に、外から来る救援物資等をひとまず館山で降ろし、館山には海上自衛隊もあるので、自衛隊との連携の元、都心へ運ぶ、あるいは都心からの避難船や、一時帰宅困難者を館山で一時的に預かる、という役割もこれから考えていかなければいけない。

11. 「笑顔あふれる 自然豊かな『あったか ふるさと』館山」

「笑顔あふれる 自然豊かな『あったか ふるさと』館山」ということで、今後10年間の総合戦略に館山の未来都市像が描かれている。海というものを本当に見つめ直し、海を使った地域の活性化を図っていくことによって、この「あったか ふるさと」を目指そうということで、来年度から新たな一歩を踏み出そうとしている。

館山は海の上に富士山が浮かび、その上にさらに夕日が沈むという景色が見られる。これだけに限らず、本当に美しい海があり、豊かな自然がある地域。この館山の美しい海、自然を守りながら、地域の活性化のために活用していきたい。

■活動事例③ 海辺のまちへライフスタイルシフト

プレゼンター:八代 健正さん NPO 法人おせっ会 理事長/株式会社シー・デイズ 代表取締役

はじめに

・NPO 法人おせっ会と株式会社シー・デイズについて、この二つの活動を併せて今回発表したい。

1. NPO 法人おせっ会

NPO 法人おせっ会は、元々は館山の商工会議所青年部の 50 周年の記念事業で何をやるかと考えた時に、2030 年に人口が4万人を切る、というようなデータがあり、私たち商工会議所青年部とすると、いよいよお客様がいなくなって商売ができなくなる、と。じゃあ、今、この 50 周年を記念して何をすべきなのかということ考えた時に、私たちは 50 年後もこの地域で商売できるように人口を増やしていきたい、減るのを少しでも緩やかにしていきたい、ということで始まった。

今、行政や民間の観光協会で、一生懸命観光地としての館山・南房総を宣伝しているが、住むところという意味でのプロモーションはそれまであまりなかったもので、私たちが商工会議所青年部という団体で住むところとしてのプロモーションをかけよう、と始めたのが最初。その手法としては、「ふるさと回帰フェア」という、東京にある移住促進をする NPO 法人が主催するイベントに参加したり、自分たちで手作りのホームページをつくって公開したり、SNS、Facebook、Twitter、当時は mixi のようなものを使って広報したり、それから、今度こんなイベントをやりますとか、館山はこんないいところですよ、ということを新聞社やテレビ局にどんどんプレスリリースをかけて取材していただいたり、そういったことを繰り返していった。

2. おせっ会の移住促進活動

平成 24 年から館山市から委託をいただき移住相談業務をしており、現在週に6日間、いつ来ても移住相談を受けます、ということで移住者の方の相談に乗り、お手伝いできる態勢をとっている。

それから、移住体感ツアーというものを年間3~4回行っており、館山に引っ越そうという方に、館山はどんなところで館山でどんな暮らしが展開できるか、体験していただくプログラムを組んでいる。

最近では、地域のイベントを作るようになってきており、「安房コンでカンパいしよう！」というポスターがあるが、これはいわゆる街コンで、地域の出会いを創出しようということと並行して、この1月には婚活ツアーみたいなものを作り、婚活イベントもやらせていただいている

おせっ会に問い合わせが一番多いネタが、空き家バンク。この地域の空き家は館山市で約 2,000 軒あるという風に言われているが、その 2,000 軒の空き家を何とか活用して、移住して来る人たちに紹介して住んでいただこう、という活動もしている。が、なかなかこれは上手くいっていない。

そんなことをやりつつ、今までの成果、移住相談件数の推移としては、移住相談件数が合計 870 件ぐらいになる。そして、移住をしてきた方が 350 名ぐらいになる。

今日の CNAC のテーマが「海辺の～」ということで、私たちもメインで売っているのはそこ。「海や自然があるこのまちで暮らしませんか？」みたいなところをアピールしてプロモーションをかけているが、そうすると移住体感ツアーの農業ツアーなどでは、「いいね！じゃ、見せてもらいたい！」と、どんどんツアー

に参加してくる。私たちもいろいろなところを案内する。これはちょっと種類の変ったイベントで、ちょっと荒地になった土地を、それこそ、今日来ている神保さんに先生になっていただき、その荒地をどう遊ぶか、みたいなことをみんなでワークショップをしたりしながら案内している。

2013 年の子育て体感ツアーでは、子連れの移住相談に来た方たちを招き、小さな小学校に体験入学し、その子どもたちに、僕たちこんなところで遊んでいます、みたいなガイドをしてもらったりした。そうすると参加者の方から、館山で暮らすとこんな暮らしができるんだ、館山の人たちってこんな暮らしをしているんだ、みたいな話になったりする。

3. 海や自然に関わりながらの生活の実現に向けて

自分は仕事帰りにサーフィンをしたりするが、自分の身の回りを見回してみると、移住してきた方も含めて、海とか自然とかに関わりながら生活している方は意外に少ない。そんな中で、私たちはおせっ会で活動していて、そういったことをジレンマとしてずっと持っていた。私たち館山市民、南房総市民の人たちが、この地域で、楽しく環境を活用して生活するという実践をもっと推進していかなければいけないのではないのか、自分たちがもっと幸せでなくてはよそから来る人はこの地に憧れるということは起きないのではないのか、というようなことを考えていた。

その中で、ここから先は私が企画をして、当時パワーポイントが余り使えなかったのでスケッチブックに企画書を書いて、お金もなかったのに、紙芝居みたいなプレゼンテーションをして、「この事業に投資しませんか」と、いろんな方にお話ししながらも、そんなことをしてくれる人はいないだろうと思っていたら、「いいじゃない、出すよ」という方が出てきた。実は、もうちょっと小さく、こそっとやろうと思っていたのが、「北条海岸のど真ん中あたりで、土地を買ってやっちゃおう」みたいな人が出てきて、その投資を受けて始めたのが、今から少しだけ紹介させていただく株式会社シー・デイズという会社。

4. 株式会社シー・デイズ

この会社は、「海や自然と遊ぶことで“ひと”と“まち”を元気にする」ということがミッション。具体的には、遊び方、いわゆる暮らし方、この地域の環境を豊かに生かしながら暮らしていく暮らし方を提案している。また、遊ぶため、暮らすためのインフラ整備をしている。

5. 株式会社シー・デイズの活動

私たちが具体的に何をしているかというと、BEACH ヨガ、サンセットヨガ、それからスタジオもあるので、スタジオの中で、通常仕事帰りにヨガ、ピラティス、エクササイズなどをする人へのプログラム提供をしている。

それから自然に出ていき、アウトリガーカヌーという、ハワイのカヌーのプログラムを組んだり、スタンドアップパドル(SUP)やトレイルランということで、花嫁街道を走ったりもしている。

それから、ちょっと離れて、丸山の道のランニングのプログラムを組んだり、そういったことを日々展開している。

こういったことの全ての根底に、最近すごく感じるのは、ランニングやパドリング、それからヨガといった

ところに、それぞれ小さな小さなコミュニティーができ上がり、今まで横の繋がりが全くなかった人たちが、自然を通して繋がりはじめ、運動を通して元気になり、私たちが目指したミッションの、海や自然で遊ぶことによってみんなが元気になる、まちが元気になる、ということに、少しずつ近づいていっているのかな、という風には感じている。

今後の展開としては、もちろんこれは収益ビジネスなので、どんどん収益を上げるために会員を増やして、ということももちろん考えているが、もっとその根底にあるのが、会員が増える、収益が上がるということのバランスを、この地域の良さを理解し、活用して生きていく、という人たちがどんどん増えるということ、今度は外へ発信することによって、この地域のライフスタイルに憧れて、どんどん引っ越してくる人が増えるところに繋げていく活動を展開していきたい、という風に考えている。

6. NPO 法人おせっ会と株式会社シー・デイズの活動を両軸として

おせっ会の活動と、シー・デイズの活動を、切り離して話を聞かせてくれということで良く問合せがあるが、今回 CNAC の神保さんからオファーがあった時に、これを関係させて話をしてくれということで、非常に光栄に思っている。目指すところは、おせっ会での移住、定住、かつ促進活動と、中の生活をより楽しく豊かにしていくという活動、ここを両軸にして活動をしていくということ、今後も固めていきたいと考えている。

■活動事例④ たてやまの海で学ぶ～根づく海辺の体験活動～

プレゼンター: 竹内 聖一さん NPO法人たてやま・海辺の鑑定団 理事長

はじめに

・海の体験活動をしている団体。よそから移住してきて、こういう活動を始めるまでの話をしたい。

1. 館山の概要と課題

南房総は館山市を含む3市1町で構成されている。すごく豊かな場所。他の地方と同じく、人口減少、高齢化の問題がある。アクアラインや館山道の開通により、首都圏か本当に遠くない場所になった。地域課題としては、人口減少、それと先日の地震にも影響を受けた。

これは南房総エリアの観光入込数。体験活動をやっているので調べてみたが、あまり増えていない。館山道やアクアラインが開通すると、ちょっと増えている。

従来型観光の現状としては、海水浴をやる人がどんどん減って、右肩下がりになっている。

そういう中で、何で生きるのか。地域は自然の宝庫と云うが、本当にそうで、それにプラスして、やはり世の中の流れがだんだんそうになっている。その中で、やはり地域資源を活用するというような可能性があるんじゃないか、ということで活動している。

僕たちの目指していることは体験活動だが、地域振興も目指している。そういった中で、地域資源を守りながら生かすエコツーリズム、ということを入れて活動している。

2. 館山の海の魅力紹介～沖ノ島～

それでは館山は実際にどんなところなのか。

館山には内湾と外洋の両方があり、鏡ヶ浦と呼ばれるほど波が静かな内湾と、外海、太平洋に面したところがあって、どちらも黒潮の影響が強い。風や台風が来ないときはとても波が静か。

ここが沖ノ島で、館山湾の南側に位置する無人島。ここで僕たちは主に活動をさせて貰っていて、周囲1キロの小さい島だが、いろんな発見がある。サンゴの北限域であったり、ちょっと暖かいところの植物が240種類あったり、縄文遺跡があったりと、そういう場所。ここでは、本当にいろんな発見がある。

その一例で、これは縄文遺跡の中から出てきたイルカの頭の骨で、実は縄文人はイルカを食べていた。沖ノ島の遺跡からは、イルカの骨がたくさん出てきており、これはイルカの歯。この縄文遺跡を発掘調査したのが10年近く前。これは、一部で有名なイルカの耳の骨。先般急逝された三瓶雅延さんが、イルカの耳の骨をキムタクの胸にぶら下げた、ということで、ちょっと有名になった。

海岸にはいろいろなものが漂着する。そういったものを探すことをビーチコーミングと言うが、いろいろなものが打ち上がる。

植物もいろいろなものがある。春夏秋冬とさまざまな植物が海岸に咲いている。海と森がつながった沖ノ島。海にももちろん磯際にもいろんな生き物がいて、イソギンチャクだとか、こういう小さい貝だとか、磯の観察もできる。海の中もこんな感じで、意外と暖かいところの魚が結構いっぱい見える。

藻場を形成するアマモは貴重で、自然豊かな砂地に生息するが、今東京湾のいろいろなところで再生活動をしている。そういうアマモも生えている。別名「りゅうぐうのおとひめのもとゆいのきりはずし」。

これがイボサンゴというサンゴで、水深1メートルぐらいのところにいる。サンゴというのは、骨格を持ったイソギンチャクの仲間。サンゴの中にソラスズメダイが群れているのが見られる。ククメイシ、ニホンアワサンゴ、サンゴイソギンチャク…サンゴイソギンチャクと共生できる魚がクマノミで、クマノミも生息している。

危ないやつもいる。トラウツボ。

海藻の森の中には小さな魚たちがいる。さらに小さい赤ちゃんの魚も比較的浅いところで見ることができる。ミヤコキセンスズメ、コロダイとホンソメワケベラ、カゴカキダイ、オヤビツチャ、ツノダシなどの南国の魚たちも見ることができる。

3. さまざまな自然体験活動の実施

この自然の中で僕たちはどういう活動をしているのか。

自然体験活動をしており、まず先ほどの沖ノ島のエコツアーを実施している。これは、宿泊業者さんと連携をしたりして実施している。

それから、夏の間はスノーケリングを実施している。昨年の夏は、おかげさまで1,000人ぐらいの方に参加いただいた。漁業組合と連携をしながら活動している。

それから、海というと夏のイメージがあるが、海と繋がった里地を生かした活動もしている。

先ほど石井課長からも紹介があったが、栈橋を活用した釣り体験、釣り大会といったこともしている。

CNAC初め、さまざまな地域の団体と連携しながらいろいろな活動を展開している。

去年は、初めて漁協とコラボして、海藻収穫体験というのをやった。海藻も立派な資源だと思う。それと体験活動を組み合わせたことを実施している。

沖ノ島を生かした環境教育ということで、いろんな学校、団体の受け入れ等を実施している。さらに、その中で、海岸清掃、年に1回の海岸のごみ調査を行っている。

拠点ということで、海からの贈り物館(館山市沼(丸高石油内))も展開している。

4. 海の魅力発信と地域振興の両立を目指して

そういった中で、いろんな連携をしながら、将来はどんなことを目指していくかということを中心に話したい。

いろんなプログラムをさまざまに展開することによって、やはり自立した展開を目指したいと常々考えているが、なかなか実現は難しい。何とか頑張っていきたい。

そして、その中で重要なのは、やっぱり地域の資源としての自然を保全する仕組み、これは、やはり自分たちだけだとどうしてもできないので、いろんな人たちと連携をしながら、ぜひ進めていきたい。その中で、ぜひエコツーリズムをいろんな形で進めていきたいと考えている。

僕たちの目指す考え方としては、そういったいろんな連携の中から、さまざまな活動を通じて、海の魅力と地域振興が両立できる仕組みをこれからも続けていきたいと思っている。

◆活動事例報告: 質疑応答

会場①: いろいろなエコツーリズムの活動をされているということだが、元々館山の方ではない中で、そういう地域の楽しさや、人を呼ぶ地域のよさというのは、どうやって発見をしたり、見つけたりするのか。コツをちょっと教えて欲しい。

竹内: まず、自分が好きだということ。自分が自然が好きだとか、海が好きだというところがある。よくある話かもしれないが、やっぱりよそ者目線かと思う。やはりよそから来ているので、最初のうちはとにかく何でも新鮮だった。本当に身近なところからいろんな発見はあると思う。これからの地域というのは、そういうことが重要と思う。

会場②: 以前館山に住んでいて、今日は東京の荒川から来た。移住者の数を発表されて、7~8年で870件相談があって、350名が来られたという話があって、すごい数だと思うが、どこの地域も人口が減って、房総でも、大変工夫をしていると思うが、館山の魅力をベースにしつつも、これだけの数の方が来られるということだと、職場等の現金収入を得ることとの結びつきが、どんな形になっているのか、教えていただきたい。

八代: 確かにそこが大きなテーマで、なかなか生活の収入と支出のバランスが合っていないというのは、よくある話。私たちが60軒ぐらいの移住者にアンケートを取ったところ、月の世帯収入が平均11万円下がるというデータとなった。その一方で、家賃の差額が6万5000円。だから、6万5000円建物、住宅に掛かるお金が安くなる。また生活のリサイズを行い支出を抑えることができ、「あといくら収入が最低ラインとして必要なのか」というアンケートの平均回答額は5万円ちょっと。その5万円をどう詰めるか、

もしくは5万円をどう稼ぐか、どちらかかの選択肢になると思う。

今のところ、館山の就職先は、1月のデータでいうと、有効求人倍率 1.6 を超えていて、職だけはいっぱいある。1.6 というところと東京都とほぼ同じとなるが、人件費が安い。どうしても収入がさがる事が多くなるわけだが、どこに生活の幸福度を求めるかが大事で、そもそも収入がいっぱいあればいいという考え方であれば東京にいたほうが良い。お金じゃないところに幸福度を求めるからこそ東京ではない、館山へ、という選択の中をするわけで、どう生活を作り込むのかを皆さんそれぞれが工夫されているところは、生活をとりあえず成り立たせているという人が多い。

今後の課題として、この地で子育てをする希望者が増えてきている今日、もう少し安心感が欲しいという人が増えつつあり、地域の民間企業、行政みんなで努力しなければいけないのかもしれないと考えている。

■パネルディスカッション「海辺の文化とくらしのこれから 10 年」

司会：フォーラム後半、パネルディスカッションを始める。テーマは「海辺の文化とくらしのこれから 10 年」コーディネーターは CNAC 顧問の佐藤初雄氏。パネラーは事例報告をいただいた4名と、コメンテーターとして、CNAC の三好代表理事。

1. 導入

佐藤：私自身も国際自然大学校を 1983 年に作っており、今現在は NPO ではあるが、来年度は多分 90 人ぐらいの職員数になる。NPO でありながらなぜ、と思うかもしれないが、日本の場合だとどうも NPO というボランティア団体のように思われがちだけど、欧米だと下手な企業よりも大きい NPO が数多くある。私のところはたまたま事業型の NPO ということで、これでしっかりと食べていけるというものを三十数年前に立ち上げた。そんな関係もあり、この CNAC にも関わらせていただき、ここ千葉においては、千葉自然学校があるが、その設立にも関わらせていただいた。現在、自然体験活動推進協議会の代表理事をしているのも、ずっとこの分野で関わってきたということで、この役を仰せつかった。

先ほどいい質問が出ていて、そのまま質問で終わってもいいかと思ったが、せっかくこの時間をいただいたので、今日のテーマが、暮らしと文化という、なかなか大きなテーマで、最後のまとめがどのような形になるのか、恐らくまとまらないと思うが、皆さんから先ほど発表いただいた以外のコメントも引き出せたらと思っている。

※各パネリストにはA3の紙を予め配布しており、佐藤コーディネーターからの質問に対し、そこにキーワードを書き、キーワードについて発言する、というスタイルで進行した。

2. 「一番の売り、伝えたいこと。」

竹内：やはり、「楽しむ」。これは自分も楽しむということもあるし、特に体験活動に関しては、訪れる人、もしくは参加する人が楽しむ。この楽しむ中から楽しんだことを好きになって貰いたいと思う。例えば、海。海の生き物、もしくは海の楽しさ、その海からの発見、そういうことを通じて、やっぱりこの南房総の、もし

くは僕らの活動を通して、いろんなことを楽しんで貰いたいということが、すごく思いとしてある。

石井: 私は全く役所の職員という立場を離れて、個人的な話をさせて貰うが、私の売りは「夕日」。私は素人だが、写真を撮るのが実はすごく好きで、特に夕日の写真がすごく好き。だからこそ、先ほど最後にダイヤモンド富士の夕日の写真を載せたが、ダイヤモンド富士に限らず、季節ごとに館山で見る夕日というのがすごくきれいで、例えば、冬はかなり南の方に沈むが、普通は伊豆半島か大島に沈んでしまって、水平線に沈む夕日は実は館山ではあまり見られない。だけど、冬の間は館山の船形から那古にかけてのある一角で、水平線に沈む、ほんのちょっとのすき間がある。そこに沈む夕日が見られて、いわゆる、だるま夕日も見られるし、夏は当然富士山の近くに沈んで、富士山がシルエット状に浮かび上がるという、本当に私は1年を通じて、夕日ハンターじゃないかと自分で思うぐらい追っかけている。それほど夕日の写真が好きなので、まず、この問いには「夕日」と書かせて貰った。

佐藤: 竹内さんの「楽しむ」というのと、「夕日」を楽しむという意味では繋がっている感じがする。

八代: 「共感」。おせっ会は NPO 法人で非営利活動、株式会社 SEADAYS の方は、営利活動という違いはあるが共通しているテーマはライフスタイルの提案。おせっ会にしても、シー・デイズのサービスにしても、押し売りで住めるものでもないし、買えるものでもない。商品とはそういうもので、なぜ我が社の商品を、誰が何のために買うのかといったところを整理して、ちゃんと売り込むというのがセールスの王道だと思うし、移住促進でも能動的に館山に住みたいと思ってくださる人にアプローチしておせっかいをやく。おせっ会にしても、シー・デイズにしても、**まずお客さまが私たちと同じように私たちの好きなこの館山の暮らしたりライフスタイルに共感してくれる、というシステムを作っていく、**ということを常に考えている。

櫛原: 「元気の素」。皆さんが、いつも私の顔を見ると、「おかみさんの顔を見ると元気が出る」と言ってくれる。私の「元気の素」は、やはりいろいろなところで活動させていただいていること。こういった話をさせていただく機会もそうだが、房総の女は元気が一番！と言っているが、それだけではなくて、やっぱり何か自分の気持ちの中で支えとして持っているものがあるということは、私にとって「元気の素」だと感じている。孫が6人もいる中で、**まだ孫の子守よりも仕事が好きというのは、私にとってやはりやるべきことがあるから、**というのが、大変強い思いの1つにある。

佐藤: 今、4人の方に一番伝えたいこと、ということで聞いて、キーワードが非常に絞られた形で出てきたが、何か4人とも共通しているのは、みんな誇りを持っていると言うか、芯があると言うか、**やはり惚れているものがここにあるのではないか、**という気がする。

三好: 一言で言うと、館山元気だなと。4方がどういうお話をされるかな、と思っていたが、一番驚いているのは、行政の方が元気だな、と。民間の方が元気なのは当たり前ですけども、**行政の方がこれだけ元気なのは、やっぱり町自体が元気だということ**で、非常にびっくりした。

佐藤: 先ほどの金丸市長のご挨拶にもあったが、館山市の行政はそんなに元気な人が多いんですか。

石井: ここにも行政職員が何人かいますけど、どうですか、皆さん。全員が全員というわけではないだろうけど、元気な人はいっぱいいる。

佐藤: ありがとうございます。

3.「館山の 10 年後のイメージ、活動の 10 年後のビジョン」

佐藤:今日のパネルディスカッションのテーマが「これからの 10 年」ということで、館山の 10 年後のイメージ、今やっている活動の 10 年後のビジョン。先ほど竹内さんはプレゼンの中で将来像があったし、行政の石井さんもこんな 10 年がこれから始まるという発表もあったが、個人的に将来こんな風になってほしいという将来像を、ご自身のお店だったり、活動が 10 年後こんな風になっていきたいという将来像を書いてください。

八代:「インフラ」とした。「インフラ」というと石井さんが言いそうな感じだが、先ほど言ったとおり、私たちおせっかも館山・南房総のライフスタイルの提案を考えている。南房総・館山で豊かな暮らし、ライフスタイルを作っていく。それをもっと具体的に実現に近づけるお手伝いをさせていただいているのが、株式会社シー・デイズということで、どうありたいかと言われれば、間違いなくインフラ化していきたいという風に思っている。

佐藤:どういうインフラ？

八代:なくてはならない、これがあればそれを実現できる、という存在になっていく、と。会社としても、団体としても。

石井:私は高品質な市民生活が 10 年後にあればいいと思っていて、非常に抽象的な考え方もかもしれないが、じゃあ、何をもって高品質とするか、とした場合に、確かに経済的なことを求める人もいるが、やはり館山の場合は、この豊かな自然の中にいて、お金の問題もさることながら、まず、ここに住んでいてよかった、と本当に心底思えることが、実はその人にとってとても質の高い人生なのかな、いつも思っている。住んでいることに満足できる市民生活、それは、豊かな自然ということもそうだし、一つは豊かな人々とのコミュニケーション、あるいは連携、助け合い、そういったものも全てひっくるめて、高品質な市民生活が得られるような館山市であってほしいと思う。

佐藤:行政マンに戻ってしまいましたね。竹内さん。

竹内:「沖ノ島」と書いた。これはなぜかと言うと、今までずっと沖ノ島とで活動してきたが、これからの 10 年、フィールドとしていろいろな課題があるが、ここでちゃんとした仕組みを本当に作ることができるのか、というところが今おぼろげにあって、10 年ぐらい経った時に、僕らの仲間で「職業は何ですか」と聞かれたら、「沖ノ島」と答える人が出てきたら面白いんじゃないか、と最近思っていて、10 年ぐらい先だったら、こういうのもあり得るんじゃないか、と、ちょっと書いて書いた。

佐藤:すごい、自分の島にしてしまう、沖ノ島を。それだけ魅力のある場所、希有な島？

竹内:はい。いろんな意味で注目を浴びていて、特に夏の間はすごく人が来るようになった。すごく人気の場所になっているが、その一方でルールとマナーの問題が起こっていて、そこで一つ仕組みを作っていくことで、何か新しい将来像が生まれるんじゃないか、と、ちょっと今画策していて、そういう可能性を秘めていると思っている。

佐藤:楽しみ。竹内さんはこれまでもう十何年間もやって来て、沖ノ島自体が随分変わってきたという感覚はあるか。

竹内:良くも悪くも、すごく有名になったとは思っている。だから、しっかりとした保全と活用の仕組みができていくようなエリアとして、また情報発信できるのではないかと考えている。

櫛原:「跡取りを育てる」。私はもう高齢者に入っているのです、これしかないと思う。これは後継者という意味ではなくて、私は地域を巻き込んで今までやってきた。そういう意味で、周りの人を巻き込んでやっていきたい。私は今、鯨の料理店とか、民宿とか、そういった人たちのおかみさんの会をしている。その中には、その息子たちも入って活動をしているが、今後はそういったような枠は要らないんじゃないか、と。**地域の人みんなを巻き込んでやっていけたら**という思いでいる。跡取りというのは、私たちと一緒に活動を広げてくれる人。今までも、もちろんそうじゃない人もたくさん手伝ってくれて、いろいろなイベントなどをやってきたが、おかみさんの会としての枠組みの中でやって、その時だけお手伝いするというような形だった。今後はそういった枠は要らないんじゃないか、と考えている。そういった意味での跡取り、私の跡取りではなくて、活動の跡取り、を残していけたらというような思いがある。

佐藤:非常に大切なキーワード。本当に、こういう活動をやっていくためには、後継者とか、特に私たちもそうだが、それなりの経験を経てきて、後はどうするんだ、という、それを引き継ぐ人をどう育てるか、というのはどこも課題じゃないかと思う。その意味で、今将来像を書いて貰ったが、そこには、今言ったように、たくさんの課題がある。その将来、10年後を作るためには、こんな課題があるだろう、というキーワードを作るための阻害要因になっているものをちょっとキーワードで書いてください。その実現のために、阻害になっている課題。

4. 「10年後、を作る時の課題、阻害要因になっているもの」

八代:「草食男子」。阻害ではないが、**地域の男性をもっとガツガツさせる**というか。実は、おせつ会で婚活ツアーをやっているが、女性が都会から来る、男性がこの地域で集まるという時に、女性の方が肉食。食べられちゃいそうな勢いなので、これはちょっといかんかと思っていて、株式会社シー・デイズの方でも、女性がやっぱりガツガツいく。男性はあまり、「まあまあ、僕はいいよ」みたいな感じで。何か男性がガツガツして、元気になるところは、我が社としてというよりは地域として、おせつ会として、何かその辺を、男性が、すごくわくわくするような何かを作っていくという仕掛けは必要と考えている。

佐藤:非常にこれはもう社会的なテーマじゃないかと思う。竹内さん、今の「草食男子」という言葉に、お客さんやスタッフや何かで共感することはあるか。

竹内:そうですね。「草食男子」に直接繋がるかどうか分からないが、例えば体験活動に参加してくる人のイニシアチブを握っているのはやはり女性が多い感じがする。例えば親子ばかりじゃなく、カップルで来る若い人もいるが、申し込みをするのは女性。家族の場合は、それは多分よく言われているが、財布を握っているのは女性、みたいなものはあるのかもしれない、やっぱり女性がイニシアチブを握っているというのを感じることは結構ある。

佐藤:ある民間の大手新聞社が採用試験をした時、成績の上から10人が女性ばかりだったという話がよくある。やっぱり成績優秀で、採りたいと思うのも女性が多いという話もよく聞くが、櫛原さん、今の「草食男子」について、元気なおかみさんの会だとどうですか。

櫛原:やはり、私たちの世代の千葉というか、**漁村のまちは、1年のうちほとんど亭主がい**ない。ほとんど海に出て、北海道に行ったり、三陸に行ったりというようなことで、よく聞くのは消防団もお母さん方がやっていたというようなことで、留守を預かる者としては即断即決。待った、なんて言っていられない。私

はそういう土壌で生まれたという意識があるので、私に関してはそういう血が入っているのは確かだと思うが、よそのお母さんたちはそんなことはないと思う。

佐藤:石井さん、「草食男子」に関して、個人的な感想はあるか。

石井:「草食男子」に直結するかどうかかわからないが、結婚しない男性職員が割といて、それが「草食男子」かどうかはまた別としても、そういうところにも影響はしているのかと。そうすると、やはり将来的に少子化という問題になってくるので、**脱草食系をしてもらいたい**。

佐藤:なるほど。多分これは全国的な状況じゃないかと思う。どこの地方に行ってもこういう話を聞き、活動の中でのリーダーも男女比があると思うが、今の「草食男子」に絡めて何か、三好さん。

三好:「草食男子」という言い方ではなくて、やはり、気になるのは行動力の差だと思う。アクションを起こすのは明らかに女性のほうが早いし、素早いし、男は動かない。それはすごく感じる。

佐藤:会場からは。

会場③:一つコメントを。今のコメントを聞いていて自分の家族のことも思ったが、今日のタイトルにあるように、文化とか暮らしとかいうワードがくると圧倒的に女性の感性のほうが豊かだと思う。男というのはどう考えても、危機が迫っていると、体を張って何かをやらなければいけないとかという局面にならないと、本気にならないのではないかという気がする。だから、今櫛原さんが言ったように、お父さんは海の上で体を張っているということがあるから、お母さんが当然家を守るというか、地域を守るということに立ち上がるわけで、だからお父さんはそういう意味ではやっぱり体を張っている。

今の日本は平和なので、本当に男の子が体を張らなければいけない場面というのが見つけれないというか、ないというか。一番男の子が奮い立つのは、お母さんに頼りにされた時とか、自分の好きな女の子に頼りにされた時とか。

櫛原:「鯨だけにとらわれない」でやっていきたい。今、それこそ、鯨を食べたことがない人が日本全国の中で圧倒的で。

佐藤:どうですか。この中で鯨を食べたことがないという人。**みんな食べたことがある……。**

櫛原:すばらしい。道の駅の方のテナントを始めてからつくづく感じるが、特徴として、テーマとして、あるいは飾り物といったようなことでは、鯨というのはオーケー。ただそれが、例えば口にして、ということになると、ちょっと三歩ほど引いてしまう。商売をやっていくには鯨だけじゃ大変。私が一番そういうことを感じているんだから、世間の料理店のおかみたちは圧倒的にそうだろうと思う。そういうことを考えると、**もう鯨は諦めた方がいいのかとさえ思ってしまうことがある**。でも、「それもあるよ」というような言い方でやっていくしかないのか、と、この先の生き残りは、というような思いを大変強く感じる。

IWCの会議で、もう30年近く鯨を獲るのが難しいということになって、昨年あたりからなおのこと締めつけがあった。地元で獲っている鯨を、「鯨を獲っているの？」とよくお客さんに聞かれる。私たちは、禁止されている枠外の鯨を捕鯨会社さんが獲っているから、それを地域として、鯨のたれであったり、時雨煮であったり、竜田揚げであったりというようなものを食べているが、なかなかそれが直接商売に結びつかないという悲しい現実があるので、**この先商売で生きていくなら、もう鯨じゃなくて、さかなへんがついていたら何でもいいじゃないか、というようなことまで考えてしまう**。

佐藤:全国的に、世界的にもそうだが、鯨をとってはいけないという風潮があって、日本は今バッシングされている状況があるが、そういう意味で和田の情報というのはあまり日本中に広がっていないかもしれない。石井さん。

石井:私は、「人材育成と教育」ということで、ちょっと連結して書かせて貰った。さっき、櫛原さんの話で、人材育成、引き継いでくれる人をいかに育てるか、という話があったが、全く役所の中も同じで、先ほど、熱いという風に若干褒められたような気もするが、もしそうであるとすれば、その熱い気持ちを下の若い人に引き継いでいかなければいけない、いわゆる人材育成をしていかなければいけない、とそれが課題。

去年、大河ドラマで「花燃ゆ」があったが、視聴率はあまりよくなかったが私は結構好きで見ていた。あの中で、吉田松陰が「君は何を志しますか」と言う、フレーズとかがすごく好きだった。何を志すか、要するに熱い思い。そういうものを若い職員に引き継いでいかなければいけないが、実は、私もあと5年で60歳で、退職になるわけで、それまでに何かをしなればいけないという風に思って、それが課題だと思っている。

もう一つ、教育と書いたが、それは人材育成イコール教育ではあるのだが、ちょっと教育については違った観点があり、私の発表の中で、海水浴場の条例のことを話したが、10個禁止項目を書いている。その条例の中で、入れ墨はいけませんとか、そういうものもあるが、ごみを捨てないこと、というのがある。ごみを捨てないって、いわゆる社会的な常識で、ごみは持って帰るなり、持って帰ることができなかつたら、せめてごみ箱に入れるということは常識であって、それを条例で定めなければいけないのか、というのは、実は仕事をしていて疑問だった。今でも疑問に思っている。そういうところって、何に起因しているのかと思うと、やっぱり元を辿っていくと、教育なのかな、と思うことがすごくある。

竹内さんが沖ノ島の話をしていたが、私も前に商工観光課というところにおいて、沖ノ島のごみの問題が、今でもあるが、あった中で、ごみが休みの次の日になるとすごい。ご丁寧に千葉県北部の自治体のごみ袋に、燃えるごみも燃えないごみも一緒になって捨ててある。それを持って帰ればいいのに、捨ててある。我々は分別しなければいけないから、そのごみ袋を開いて、缶と燃えるごみを分ける。そうするとなんと燃えるごみで赤ちゃんの紙おむつが出てくる。ということは、このごみを捨てた人は小さい子どもを持っている親なわけで、親がそういうことをすれば、その子には、それが教育として絶対に伝わる。同じことが伝わって、また繰り返される。やっぱり元を辿っていくと、そういうところの教育というのは、本当に社会の根源で、大事なのではないかと。人材育成と併せたこととして。

佐藤:これも本当に大切なキーワードで、こういうことをやると必ず人材育成という言葉が出てくるが、先ほど石井さんが言っていた熱い思いとか、そういうものは、何か本を読めばその心がふつふつと沸いてくるというシステム……、むしろ、本人が内側からその思いを持っているとか。こういう教育だから、「これを好きになってね」という言い方はできない。本人が内側から、やっぱりこれが本当に好きだと思う、そういうものがないと、熱い心や好きというものもなかなか伝わっていきにくい。それをどうやって伝えていくのか、感じてもらうのかということが、今の教育の中でも言われているし、その機会の一つが、体験活動の中にあるのではないかと。いろいろな体験をすることによって、その中から好きだと思えるものに本人が気づいて、そこに火をつけていく。今の若い人たちという言い方をしてしまうとよくないが、何かその辺に課

題がある気がしている。

三好:最後に石井さんが言った教育というのは、すごく今ビビッときた。今日のテーマの「文化とくらし」というのは、まさしく教育じゃないか。だから、海に本当に触れていけば、海が汚くなったら嫌になるし、それを見たおじいちゃん、おばあちゃんが「だめだよ」とか、近所の人が当然怒る。そういうふう暮らしに直結していなくて、ごみ箱という存在が今の都会の生活では当たり前になっている文化になってしまっているところが、やはりすごく問題。我々が行っている体験活動は一過性で終わるのではなく、継続性のあるものにしたいと常に思っている。この「文化とくらし」というのをテーマに掲げたのは、やはりそこに繋がっていくような活動をしなくてはいけないということを思っていて、それをいみじくも、石井さんから出してもらっていて、本当に、だから必要なんだ、と思った。

会場④:私は館山サーフクラブに所属していて、夏の海水浴シーズンの監視業務を主にやっている団体で、他に、ビーチスポーツ、トライアスロンや若潮マラソンのAED隊や、海のスポーツ関係のサポートをしている。その中で、主に大人が中心となって、海の監視業務をライフセーバーというが、そのライフセーバーをやっている。その他に、地元の子どもたちを集めてジュニアの部というのを作り、今は幼稚園生から中学校3年生まで、設立当初は数名だったが、今は30名ぐらいに増えている。

その中で、月に2回活動をしているが、それが始まる前に、ビーチクリーンなどもやるようにして、海で安全に安心して遊べるように、というテーマで子どもたちにいろいろ教えたりしている。その中で、竹内さんが言っていたように、楽しむ、自分自身が楽しまないと、子どもたちにもそういうことを伝えられないし、人材育成もできないんじゃないかというところで共感した。

サーフクラブの活動として、地元の子どもたちで、地元の海をパトロールさせるということが最大の目標で、そういった後継者の問題、後継者をどうやって育てていくか、という点についても、今日は参加して、いろいろ話を聞くことができてよかったと思う。

竹内:これもよく言われることかもしれないが、「連携できるか」。僕らの活動、体験活動やフィールドも含めて、僕らだけでは全てが成り立つわけではなく、常にいろんな方との連携が図られて、行政は元より、沖ノ島だけ取ってみてもかなりいろいろな人たちが関わっている。そういう人たちと連携を取って、目標に向かっているのか、というところが、自分たちの将来像を含めて課題としてある。その中で、先ほどの教育という話にも触れるのかもしれないが、自分たちの地域が本当に素晴らしい地域なんだ、と、皆がそれぞれ認識を持つことがすごく重要と思っていて、そのためには、この言葉と離れるかもしれないが、僕たちも地域の子どもたちに地域のことを知ってもらうということが、遠回りだけれども確実というか、そこがすごく重要だと感じていて、10年先の間に、そういういろんな連携の果てに、さっき言った、職業:沖ノ島みたいな人ができるといいんじゃないかと思っている。

佐藤:はい。ありがとうございました。打ち合わせができていくんじゃないかと思うぐらいにキーワードがいっぱい出て来ているが、この連携というキーワードは、行政もそうだろうし、どこの地域においても連携というものがなくては語れない時代になってきているのではないかと思う。逆に言えば、成功させるためには連携をどう作るか、ということにも繋がるんじゃないかと思う。ととてもとても1つの団体や行政だけでは、恐らく社会の課題というものは解決できない時代になっている。それが地方に行けば行くほど、そこ

の連携、あるいは他分野との連携、そういうようなことがキーワードになっている。私が見る限りでは、結構館山ではいろいろ連携しているのではないかと、いい形で結果がアウトプットされているのではないかと、という感じを持っている。

石井さん、行政という立場でもこの連携というキーワードがあったように思うが。

石井:まさに、行政の状況はどんどん厳しくなっていくわけで、人はどんどん減らされていく中で、予算も思うように確保できない。いわゆる扶助費というか、社会保障の市の予算も随分支出をしなければいけない中で、こうした活動に対する、あるいは我々の事業に対する予算もどんどん厳しくなっていく。話は戻るが、人もどんどん減らされている中で、自ずと行政だけで解決できることは限られてきてしまうので、どうしても、その辺は市民、民間の力を借りないと、これからの地域のさまざまな課題は解決していかないのではないかと、本当に強く思う。

5. 「お金について、どう考えるか」

佐藤:八代さんが株式会社と NPO の使い分けを、竹内さんは将来職業人ということで、どうしても、お金の問題とこういった活動の問題は切り離せない。石井さんも言われたように予算もないということもあると思うので、お金の考え方、ご自身がやられている活動はバランスが取れているのか、いないのか。私たちはローカルマネーとグローバルマネーという風によく言うが、物々交換でやるようなものはローカルマネー、グローバルマネーは本当のお金。そのバランスの取り方や考え方。お金がもっと欲しいのか、あるいは、お金を取るためにはどうしたらいいのか。先ほど館山の場合の話があったが、八代さんの、生活の何に重きを置いて、価値を置いて生きていくのか、とはいうもののお金は必要、という話。その辺の考え方についてのキーワードを。

八代:「儲」。信用を集める者は儲かる NPO 法人おせっ会で収益を上げられないことをずっと悩んできたが、それは、要は信用がないからそこにお金が来ない。信用があり必要とされるところは必ずそこにお金が集まり活用されていくという経済のシステムが動きつつある世の中だと私は信じていて、お金が欲しいと手を出すと、そこにはお金が来なくて手で引っ叩かれる、みたいな時代じゃないと感じている。やはり今後僕たちのおせっ会という団体が信頼されて、必要とされて、世の中に維持されるという形があり、株式会社も多分そうだと思うが、そういう意味では先ほどに戻り、インフラになれるというところがすごく大事なのではないかと考えている。

石井:「起業促進」ということで投げさせて貰った。行政の予算を増やすということではなく、もちろん補助金を貰ってくることで単発的に予算をあがなうことができるのかもしれないが、やはり地域社会としてサステナブルに継続していくには、起業促進に力を入れた方がいいと思っている。ボランティアでいろいろやる人もいると思うが、ボランティアだとやはり続かない。さっき言ったように、本当にその人の思いがあるうちはいいが、やはりどこかお金が回らないと絶対続かないと思う。何かをやるにしても、ビジネススペースで回るような仕組みを前提として考えていった方がいいんじゃないか、と思う。

じゃあどうするんだ、どういう策があるんだ、と言われると厳しいけれど、さっき、儲け、とあったが、私は儲けて貰っていいと思う。そして、願わくは雇用も増やして貰って、それがやはり地域社会のためになると思うので、基本は儲け、起業促進。「儲け」というのは、字のとおり、信じる者ですから、信じる者のと

ころには儲けが回ってくる、ということで、それをベースに起業促進を表示していきたい。

櫛原:私の経験でいくと、やってきたことには自然とお金がついてきた。私は、儲けを一番の目的として動いてきたわけではないが、一生懸命やっていたら、それがいろいろなところで取り上げられて、営業につながっていく。あるいは、みんなが固まったことにより、いろいろなところに載せてもらう。そういうことで、行ってきたことについてきた。

私は、商売としては30年やっているが、おかみさんの会はもう10年以上経つ。そうした時に、これが自然とそういう風になってきたというのは、私にとって嬉しいことだった。おかみさんの会として、まとまっているいろいろなこともやったし、そういったことも、やはり皆さん商売屋のおかみさんの集まりなので、そろばんをはじいて行ったことだった。損のないように、それでいて、自分たちが大きく儲けるのではなく、儲けを目的としていなかったにも関わらず、それぞれのお店のプラスになっていったというようなことは聞いている。

竹内:「単価アップ……でよい?しかし、……生きていける。」長くなったが、単価アップとは何かというと、今、僕たちがやっている活動は、実は経済的な価値もすごくあるんじゃないかと思う。経済的な価値というと、お金か、という話だけど、僕の考えでは、極端なことを言うと、ごみを捨てて帰ってしまうような人は来なくていいんじゃないかと、思っている。そうじゃなくて、その価値をしっかりと認めてくれる人にぜひそういう観光的な面では来て欲しいし、その地域の価値がわかる人に地域の価値をわかってもらいたい、という思いがある。そうすることで、よくエコツーリズムでいうとエコツーリストを育てる話があるが、まさにそういうこと。このご時世に来る人を選んでいいのか、という話があるかもしれないが、100人いて100人が同じ価値を持っているとは思えないので、だから単価アップというか、そういうことで地域の価値をもっと高めたらいいんじゃないかと思う。

「……しかし、生きていける」と書いたが、そういう中で、僕個人はそんなに金持ちになろうと思っていない。生きていければいいし、海で魚釣りできればいいと思っているし、新鮮な野菜や山菜が食べられればいいと思っているし、そういう生き方ができればなおいいかな、と思っているが、逆に言うと、それが実はすごく価値があったりするのかな、とちょっと思っている。

佐藤:なるほど。そういう意味では、竹内さんは移住者の1人。外から来た人にとっての館山の魅力は、海もあり、山の幸もあり、そこに何となく物々交換ができるような仕組みがあったりという、いわゆるグローバルマネーありきの話ではない、そういうことが地域的に成り立つ場所で、魅力あるところだと思う。そういうところで、竹内さんは、仕事もしつつ、自然環境の保全もしつつ、自分も食べていけるというようなことを実践されている。いい例がここにあると感じた。

会場⑤:お金に関して、ちょっと話の路線がずれてしまうかもしれないが、お金に色があるのかとか、そういう話であると思うが、先ほどまでの話とちょっと繋げて話すと、手段、なんだと思う。特に、先ほどの教育の話だとか、もっと遡れば草食男子の話とかも繋がる部分があると思うが、特に私ぐらいの世代の人は、「今どきの若者が……」と言われる一方で、結構前衛的な思考を持っているんじゃないかと思っている。例えば、特に情報化の中で、いろいろな多様性のある選択肢が選べたり、あと一方では、バーチャルな体験ができたし、そういった諸々の手段が取れる。その中でお金が必要になってくるが、やっていく中で、やった気にもなっているというところもあるし、何となく知っているが本当は知らない部分があるという

ところで、今回、体験活動協議会ということなので、本当に知るということを手にとってお金を儲けていただく、というような、そういう風な流れになっていくのも一つなのかな、と個人的には思った。

佐藤: 今出た情報発信というキーワード。SNS、Facebook をツールとして使っているというだけではなく、向こうから取材が来たというのもあると思うが、情報発信というキーワードで、課題になっていること、実際ここはこうやっているとか、これは上手かったとか。

6. 「情報発信について」

八代: ちょっと格好つけたわけではないが、「真」という字にした。今、情報発信にお金をかけるというのは、1つの手法としてはあると思うが、Facebook や、Twitter、Instagram みたいなものがあって、お金をかけて一生懸命印刷物を1万部配るんだったら、Facebook のようなものを使っていくと、ほんのわずかな時間でもすごい数の人の目に届く。そういった意味では、虚飾した何かを発信するという形ではなくて、今集中すべきはいいものを一生懸命つくる、いいサービスを提供する、みたいなことに一生懸命頭を使っていくと、情報を発信しなくても、あとは勝手に誰かが流布してくれる、といったことなのかなと、一回り回ってみて最近すごく思う。

結構お金を使って情報発信した時期もあったが、お金を使わなくなってからの方が割といいなと思い始めている。

竹内: 情報発信と関係ないような言葉になってしまったが、「胸を張って行こう」。マイナスイメージというのも実はあることはある。地域にはさっきのごみ問題もあるし、かえって人が来ないほうがいいと思っている人も中にはいるかもしれないが、そんなことはなくて、自分たちの信ずるところを、手法はともかく、胸を張って情報発信をしていくという態度というか、そういう心持ちが必要かなと思って書いた。具体的な方法論ではないが、こういう心持ちでやっていくことが重要かと思った。

佐藤: なるほど。ツールではなく、心持ち、心構え。「真」というようなこともそう。いいもの、本物。

櫛原: 私は、来店したお客さん一人一人を大切に、ロコミというのが大きなポイントを得ると思う。先ほど、皆さんが Twitter だ、何だと言っていたが、それもこの1つだと思う。私どもで最近感じることは、お客さんの食事の前、あるいはどこかで、ほとんどの人がカメラで撮る。食事の内容もそうだし、道の駅だと、ソフトクリームだったり、そういう場面を数多く見る。私はやはりそのお客さんがどんな印象を持って帰るか、それが一番次に繋がることだと思っている。それが続いて、お客さん自身が発信してくれる。一番私が感じるのは、来店したお客さんには気持ちよく帰って貰う。その中で感想を言って貰えればそれでいいし、またお家に帰って、あそこのあれが良かった、美味しかった、と言って貰うのが一番だと思っている。

石井: 私は、「両刀使い」ということで、ツールの話になってしまうが、やっぱり情報発信という、大別するとアナログかデジタルかという話になると思うが、例えばITに強い人は、インターネットがやっぱり、SNS がやっぱりという話になるが、そうはいうものの、やっぱり高齢者に情報を伝えるにはどうしたらいいかという、もちろん高齢者でもそういうことをやっている人はいるが、やっぱり活字、新聞、雑誌、パンフレットといったもので情報を貰いたい、という人もたくさんいる。ITが余り得意じゃない人は、やっぱり情報発信はアナログだという人もいると思うが、やはりインターネットの広がりやロコミの速さというのは、非常に侮れないところがあるので、どっちがどっちというのではなくて、そのツールの特性に応じた方

法を、臨機応変に使い分けて両方でやっていくということが大事。

観光情報の発信だけではなくて、例えば人とコミュニケーションを図る場合でも、メールと電話と直接会うという、いろいろな方法があると思うが、あまりコミュニケーションが得意じゃない人はメールばかりで済ませてしまうが、遠くにいても自分の要件は何時でも送ることができるわけだから確かに便利だが、やはりどこかで会って話すと解決できる問題があって、メールではそれができない部分がある。そこは上手くインターネットとアナログと使いこなして、両刀使いでいくのがいいのかなと思う。

佐藤: なかなかこういうキーワードを聞いていると、すごく勉強になるというか、帰ったらこういうことをやってみたいと思った。

6. 「今日持って帰りたいキーワード」

佐藤: 今までいろんな人の話を聞いたが、自分が帰って、これを活動に生かしていこうとか、あるいは役所でやっていこうというような、今日の中で、これは持って帰りたいキーワード、一番心に残ったことを書いていただきたい。

八代: 今日出てこなかったキーワードだが、皆さんの話を聞き、いろんな人と名刺交換させて頂きながらお話をさせていただき、「ブレない」ということがすごく大事だなという風に思った。今後の活動も「ブレない」で、しっかりやっていこうと思う。

石井: 私はずばり、今日のテーマで「海」。やはり私の報告の中でも話したように、**館山はやっぱり海から受けている歴史的な影響がものすごく大きい**。なので、海から開かれた館山というものをもう一度見つめ直して、**海で活性化させていきたい**、というのが、今日の持って帰りたいこと。

竹内: 頑張って「続けていこう」、という風に思う。**まだまだ10年、道は長いかもしれないが、海とか、ぶれないキーワードを続けていく**。

櫛原: 私はこれを「ご縁」と思う。ここに座っている皆さんとも、これを「ご縁」に、今後ともどうぞごひいきのほどよろしく願いたい。

三好: CNAC の代表理事ということで、ここに座っているので、少し CNAC としての話もしたいと思うが、CNAC は、いわゆる NPO だが、中間支援組織、全国組織なので、各会員さんを支援するというのが大きな目的になると思う。今出てきた中で、地域で活動している海に関する団体に支援できる仕組みをつくっていかなければいけない。そこで、継続できる組織のためには、非営利団体であっても、利益というか、必要経費はきちんと設けていいと思う。必要以上のお金は儲ける必要はないが、必要な人件費や事務所経費も含めて、それはちゃんと貰えるような連携がきちんとできて、それが地域にとってもいいことであるということを、CNAC として、海に関する活動ではそれが必要なんです、ということ発信していかなければいけないだろうと思っている。

今日は一つ情報というか、役所の方がいるからもうご存知と思うが、海洋基本法が平成19年に制定されて、もう10年近く経っているが、これに関する海洋基本計画というのが平成25年に出された。「国民が海洋についての理解と関心を深めることができるよう、学校教育及び社会教育における海洋に関する教育の推進のために必要な措置を講ずるものとする」という法律が、ちゃんと平成19年にあった。それに

則って海辺の活動をしなければいけない、ということで、法律が既に制定されているが、やっとな海洋教育の中で、超党派等で動きが出てきている。国にこういう法律があるんだったら我々もそれをちゃんと理解して、中間支援組織として、こういう地域の方々を支援できるようにならないといけない、我々のミッションも非常に高い、と。目指すものはいっぱいあるが、改めて今日は館山の皆さんに元気をいただいたので、何とかさらに元気にできるような支援ができれば。CNACとしても頑張っていきたいと思った。

7. まとめ

佐藤: 今日いろいろとお話を聞かせていただき、鯨の良さや、沖ノ島での体験活動の本物、そういう本物を作っていないと、次に信用を得て広がっていくということに結びついていかないだろうと思う。そこに取り組む人の姿勢、「真」をもって臨んでいるとか、いいものだから、好きだからというようなところで、それに取り組むというのも、次なる広がりにつなげるための信用に結びつくためには、そういうことが必要なかと思う。

それから、今日は行政の人もたくさん来ているので、やはり連携というのは、私はこれはもうなくてはならないということをおもひも言ったとおり、このキーワードをどうやって具現化していくかというのは避けては通れないと思う。

今、三好代表からも海洋法の話があったが、私も自然体験活動推進協議会の方で、今、超党派で議連を作っていて、国会議員の先生方に**自然体験活動推進法**なるものをぜひ作っていただきたい、ということで、実はもう3年前に条文の骨子ができていて、ちょっとその時に政権が変わってしまったので、成就できなかった、立法化できなかったが、ここへ来てまたちょっとその方向に向けての動きが加速しているので、近い将来にそういったものを作って、この自然体験、もちろん海辺での活動もそうだが、陸地、里山、そういうところでも自然体験が行われていく、それによって地域活性化が進む、というようなことに繋がっていききたいという風に思っているの、そういった情報が出たら、また上手く地域でも活用いただければと思う。

■閉会あいさつ CNAC 副代表理事 小池 潔

実は5歳ぐらいの時、もう50年近く前になるが、最初に原体験としてきれいな海を見たのはここ館山だった。その当時は、まだ蒸気機関車が走っており、蒸気機関車でこの館山を訪れた。私は川崎の京浜工業地帯で幼少時代を送ったので、私の知っていたそれまでの海というのは、油の浮いた、錆びたビッドに座って見た、もくもくと上がる煙が雲と同化するような空の下の海だった。ひしゃげたビール空き缶がコツコツと堤防に当たるような、そんな海しか知らなかった私が初めて見た素晴らしい海がこの館山だった。きらきらと輝いていて、少し濃い紺色で、見るもの全てが感動だった。小さい川にはサワガニがいて、素晴らしい自然だったことを覚えている。

今日改めて館山に来て、登壇された皆さんの話を聞いていて、自然とは別に、ここにいる皆さんの人としての魅力に改めて心を打たれた。

皆さんのそれぞれの活躍の話を聞き、さまざまな移住者の方たち、竹内さんは元々は東京にいた方で、

こちらに同化している姿を見ていて、どっしりとそれを受けとめている櫛原さんのような方や、石井さんのようなアイデアと情熱にあふれた行政の方、こういった方が一体となって館山の魅力を形づくっているということに改めて感動した。

交流と連携が一つの目標に到達するための一枚岩の力となるということ、それを私たちの目標としてGNACは活動してきた。「皆で汗かく三つの広げよう運動」ということで、仲間を広げよう、活動を広げよう、そして、感動を広げよう、と、この3つを目標に3カ年でやってきた最終の3年目、この館山で集大成を聞くことができ、本当に幸せと思う。

ご登壇いただいた皆さん、ご協力いただいた関係各位、誠にありがとうございました。

(了)